

薬学研究院生による男女共同参画型交流会

日時 平成21年11月27日(金) 17:00-19:00
 場所 京都大学薬学部1階マルチメディア講義室

女性研究者支援センターは、女性教員と院生との交流会を、理学部、農学部、工学部、教育学部などで開催してきました。しかし、薬学研究科は女性教員が少なく、交流会を持つきっかけを探しあぐねていました。今回、薬学部の先生、院生の方々の絶大な協力を得て、開催にこぎつけることができました。

はじめに、稲葉カヨ・女性研究者支援センター長より、薬学部は、学部・修士課程までは、比較的女子学生が多いけれども、博士課程に進んで、最終的に研究者になるという人が少ないことを指摘して、それがどうしてなのかという問題意識を持って、今日の瀬原先生の講演を聞いて欲しいとのあいさつがありました。

そして、薬学研究科卒の瀬原 淳子・再生医科学研究所教授より、「シミュレーション不可能な研究者の道」の講演をいただきました。瀬原先生は、子どもの頃から科学者になりたいと思っていたそうです。京都大学への進学時には、理学部と医学部には、女性教官がいなかったため、研究者にはなりにくいようだと考え、女性が多い薬学部を選択されました。しかし、分子生物学の研究をするために、ウィルス研究所に移り、さらにスイスのチューリッヒ大学に留学して、徐々に研究者としての自覚をもてるようになりました。帰国後は、国立精神神経センターを経て、臨床医学総合研究所にて、研究をされるようになりました。

子どもの頃からの希望どおり、科学者になった先生ですが、薬学部で「蛇毒の精製」の卒業研究をしていた頃は、「なんで私は蛇毒を研究しているのか」、いまひとつわからない状態だったそうです。しかし、その後しばらくして、レヴィ・モンタルシーニ (Levi Montalcini) と、スタンレー・コーエン (Stanley Cohen) の二人が、蛇毒について、瀬原先生と同じような実験からはじめて、マウスの唾液腺に同じ活性が高濃度に存在することを見つけ、それをクローニングすることで、ノーベル賞を受けるような研究成果を上げたのです。先生は、途中で蛇毒の研究を離れてしまったこと、彼らのような着眼ができなかったこと、とても悔しい思いをしたそうです。

そんなことがあって、国立精神神経センターで筋形成の研究をしているときに、蛇毒と似たタンパク質が受精に関係しているということが『Nature』に発表されたときに、「これだ」と思ったそうです。私たちも蛇毒のような出血毒を持っているのではないかと。受精にかかわると言われていたので、骨格筋がお互いに融合して筋管をつくる、その過程にも働いているのではないかと考えて研究を進め、新しい遺伝子を見つけることができたのです。そして、今後の課題は、発生や再生過程で、蛇毒

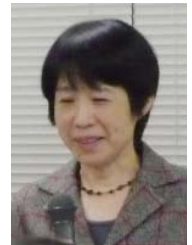
様プロテアーゼが幹細胞などの増殖・分化・移動などをどのように制御しているか、そのメカニズムを解明することだそうです。

このような経験から、まず大事なことは、「自分の研究に主体性を持って取り組む」ことだそうです。薬学部にいたころの自分には、明らかにそれが欠けていたと分析されます。一方で、学生時代の挫折は、意外に大事だとも考えておられます。それは、いつまでも心のなかにあるから。そして、「どうしてもこれを知りたい」という心も必須だと感じておられます。また、失敗も含めた研究の経験や、指導者や同僚と一喜一憂することができた、そういう環境こそが研究を続ける上で、非常に貴重であったそうです。さらには、これからは自分の研究だけではなく、研究の面白さを若い人たちや社会に伝えていきたい、科学者のコミュニティーの一員として、どうやって若い人たちを支えるのか考えることが、非常に大事な仕事だと考えておられます。

先生が大学に進学されたころは、薬学部は女性に人気のある学部だったのですが、同年代の方で、現在も研究者の仕事をしている人は非常に少ないそうです。残念なことに、この状況は今もあまり変わっていません。特に薬学部では、基礎研究分野に進む女子学生が、依然として少ないのは寂しいとおっしゃいます。

では、先生のこれまでの生活はどうだったのでしょうか。何よりも、研究したいという気持ちが最初にあったそうです。結婚、出産を経験され、ポスドク、PIの時代に研究成果が出て意欲が出る。一方、離婚したり、研究も惨敗して、子どもにも犠牲を払ってもらうこともあった。でも研究は好きで続けてきた。再婚したが夫婦とも単身赴任。心休まらないけれども充実している日々。このような現実をどう捉え、どう向き合うか。それがシミュレーション不可能な研究者人生の実態とおっしゃいます。

シミュレーション不可能でもやってこられたのは、創造的な仕事が好きだったということ、まわりの理解、協力、そして健康に恵まれたから、と先生は分析されます。特にまわりの理解を得るといふことには、非常に努力をしているそうです。努力という面では、まずは出産や育児を言い訳にしない、それが自分のプライドである。そして「この研究のなかで、これが最も大事」ということを選んでしよう心掛けてきたそうです。さらに、難しいことかも知れないが、楽観的であろうとすることも大切だそうです。研究者というのは、いつか自分の才能が開花する日が来るに違いないと思っていないとやれない商売だと考えておられるのです。また、まわりの人、特に上司は、育児中の人のことを「これくらいしかできな



いだろう」と限定して見ないということが大事だとのメッセージをいただきました。

講演後の質疑応答では、まず、現在の女性研究者を増やして行こうとするいろいろな支援の中で、能力が同じならば女性を採用しようというアクションについてディスカッションがありました。瀬原先生からは、男女平等だから、研究者も男女同数にしようという動きが世の中にあるのは事実で、また、ある程度支援をすることによって女性研究者の数を増やす努力も必要であろうが、男女平等であるからこそ、やり過ぎてはいけなし、女性もそれに甘えてはいけなし。個々人が努力して、育児や家事に関してパートナーとの協力関係を整え、研究を続けられる環境をつくるのが重要だろうという意見をいただきました。

女子院生からは、パートナーにも、育児や家事の協力を求めて、研究を続けて行きたいと考えていても、パートナーの職場がそれを認めてくれなかったら…という声もあがりました。瀬原先生は、社会制度として育児休業などが整備されているのだから、本人もパートナーもどちらも、自分のまわりの人に理解を求める努力をするべきだと、励ましてくださいました。

夫婦ともに研究者という人が多いのは、どうしてもだろうという声には、研究者ではない人に、この研究の楽しさを伝えるということは、なかなか難しいことなのではないかと話された上で、でも、一方が研究者ではない夫婦もあるし、はたらきかけや努力しだいで可能なこととお話をされました。

非常にタフな瀬原先生ですが、子どもがまだ小さいときに、どうしても大変で、社会制度でどうにかしてほしいとか、何か、自分の努力だけではどうにもならないと思うことはありませんでしたか。という問いには、保育

園のことを挙げ、子どもが病気の時は、大変だったので、今、病児保育が整備されてきているのは、いいことだと話されました。

研究者は、本当にシミュレーション不可能な人生で、浮き沈みがあり、苦しい状況が続くこともあります。苦しい時のもがき方を教えてください、というお願いも出ました。瀬原先生は、もがいたことがないそうです。研究者のこだわりとして、自分が大事だなと思ったことは、何年かかってもやりたいと考えるのは、しかたがないと思えばいい。ただ、家に帰れば、パートナーや子どもとの時間があって、研究のことばかり考えずにいられたことで、救われたかもしれない。だから、研究室メンバーとたわいもない話をするのも、精神衛生上とてもよいことであり、そうやって心のバランスをとった方がいいと教えてくださいました。

その後、3つのグループに分かれ、薬学研究科院生による「男女参加型・未来シミュレーションへようこそ！」と銘打った、男女共同参画型交流会を行いました。仮想シミュレーションの中で自分たちの将来と具体的問題点についてロールプレイを取り入れながら進め、活発な意見交換が行われました。

(女性研究者支援センター 支援室)



医療保育学会 第7回全国研修会参加報告

1月10日・11日に京大会館で開催された医療保育学会 第7回全国研修会に病児保育室から保育士1名が参加しました。

長嶋正實先生（あいち小児保健医療総合センター名誉センター長）の講演では、他国の病児保育環境の事情が説明されました。なかでもカナダ（トロント）、米国（ミシガン・ロサンゼルス）、オーストラリアなどの小児病院の保育環境の紹介があり、特にトロント小児病院では広く吹き抜けになったアトリウムやカラフルな絵が描かれている壁など、病児にとって心理的に理想的な環境を提供していました。これらから今後の京大病児保育室内の装飾などに応用できるアイデアを多く得ることができました。なお、これまでの日本の小児病院では、治療を効率的に進めることが重視された構造になっていましたが、他国の先進的な考え方にならって改善されつつあるとのことでした。さらに中村崇江先生（自治医科大学とちぎ子ども医療センター）の講演では、病棟保育士の教育計画の作成と実施について説明があり、今後は病棟保育士の養成が社会的にも急務であるとのことでした。

全体会では、重症心身障がい児保育・障がい児保育・病棟保育・病児保育・外来保育などの施設で働く保育士らの個別活動報告を聞き、他施設の医療保育について多くを知る機会を得ました。このような他施設の活動内容から、様々な面で京大病児保育室の取り組みを進めるきっかけになるヒントを得ることができました。さらに分科会では、実際に病棟保育士や大学の医療保育科の先生方と直接話す機会を得て、様々な意見を交換しました。ここで得た人的ネットワークは今後の京大病児保育室の活動を改善していくために有用であると考えています。一方、金城やす子先生（名桜大学）の講義では、「保育士職の論文の書き方」の指導があり、病児保育に携わる保育士が医療保育士を目指すにあたって、有意義な情報を得ることができました。

以上のように、本研修会で知りえた他国の病児保育環境や他施設・病院での保育士の活動状況を、今後の京大病児保育室での保育内容の向上に役立てていきたいと考えます。

(女性研究者支援センター病児保育室 北原 朋子)

平成21年度 高校生車座フォーラム

平成18年度に始めた車座フォーラムの第4回目を、11月22日（日）に開催しました。今年は、女性研究者支援センターの地域連携WGの鈴木晶子主査が在外のため、久家推進員（理学研究科）に主査代理をお願いしての開催でした。昨年と同様に女子高校生に限らず男子高校生にも参加を呼びかけました。参加者は、高校生29名（うち、女子22名、男子7名）、講師12名（うち、女性10名、男性2名）、大学院生や学部生が7名（うち、女性4名、男性3名）でした。大学院生や学部生の人達は、会場の設営を手伝ってくださるだけでなく、高校生と研究者の間をつなぐ役目も果たしてくれています。たとえば、「京大に入学するのにどんな受験勉強をしましたか」という質問に対しては、記憶が新しいことも手伝ってすぐ答えられるという存在でもあります。会場は、生命科学研究科の講義室4室をお借りして開催しました。

大学が高校生に対して開催している催し物としては、毎年8月に行われるオープンキャンパスがありますが、車座フォーラムは、大学の教員や院生らと少人数単位で話すという対話型を基調にしている点が特徴です。研究者という職業に就いている人、特に女性研究者と直接接することによって、高校生に研究職の具体的なイメージを持って貰い、将来の職業選択肢の一つとして考えられるようにという希望を持って毎年開催しています。フォーラムの最後を書いて貰う高校生達の感想に、「研究職がよく分かった」、「研究者に関するイメージは暗いという感じだったが、みんな生き生きとしていてそのような感じは払拭された」と必ず書いているので、やはり毎年開催しなければという思いに駆られて今年も行いました。

まずは、西村周三副学長・理事、女性研究者支援センター長の稲葉カヨ・生命科学研究科教授のご挨拶に続き、オープニングセッションが行われました。セッションでは12名の講師陣と若い院生や学部生の人達が、それぞれの専門分野や研究者になったきっかけなどについて紹介しました。高校生達には、講師陣の話を書きながら分科会に分かれた時に質問したいことを書いて貰い、その後、講師陣の専門分野に従って理系A、文系B、文理融合CとD計4つの分科会に分かれました。複数のグループで、大学の研究職の職階がわからないという質問があり、高校生達の大学の教員はすべて教授という誤解を解

くために、教授～助教の制度的説明がなされていました。理系Aでは、「研究者になるためにはどうするか、研究をしていてどこがおもしろいか、家事・育児はどうしているか、新しい発見はどうやって発表するか」などの研究者になるプロセスに関する質問が出ていました。ちなみに、家事・育児については、理解のある旦那さんを見つけるのがよいと回答に高校生達は笑っていました。文系Bでは、「高校時代に進路や人生をどのように考え、何に悩んできたか」また「大学入学後、文系・理系の変更は可能か」など、7名中4名が2年生のグループらしく、具体的な質問が多く出されていました。

文理融合Cでは、「研究者以外の道を考えてか」という質問が特徴的でした。また、「大学を名前だけ選ぶ人がいるが学部はどうやって決めたのか」という質問に対して、各グループを見て歩いていた西村理事よりは「今の時点でやりたいこと、興味のあることに基準をおいて選ぶのが良い」と助言がありました。

文理融合Dでは、宇宙物理が専門の先生に対して「他の星に生物が存在すると思うか？研究者はそういうことを真剣に言うのか？」という日頃ぶつけることのできない質問が出ていました。ちなみに答えは、「宇宙人はいる派といない派がいる」でした。講師陣から「研究者に必要な資質は何だろう？」と聞かれて、高校生達は、探究心、知識、熱意、お金・・・と答えていましたが、講師陣からは「体力、運（出会い）、楽観的な性格」が加えられ、高校生の驚きをかけていました。

最後に再び集まって行われた全体会では、各分科会での話し合いの内容に関する報告を受けた後、高校生からの様々な質問に講師たちが答える質疑応答の時間が設けられました。その中で、「実験で動物を殺すのはいけないと思う」という鋭い意見が出され、「線引きの難しい問題で、人を納得させる論理が必要」と講師陣はかろうじて答えているのが印象的でした。

車座フォーラムは、研究分野と大学の学部構造についての知識を得、研究職の内容を研究者と直接接することによって理解を深めるという重要な役目を果たしており、高校生達の視野を広げ、職業の選択肢を広げていくことに大きく貢献したと思っていますので、次回以降もよりよい事業に展開していきたいと考えています。

（女性研究者支援センター 登谷 美穂子）

■参加校

京都府立亀岡高等学校、嵯峨野高等学校、東稜高等学校、西乙訓高等学校、洛北高等学校、大阪教育大学附属高等学校平野校舎、清風南海高等学校、西大和学園高等学校、洛南高等学校

■参加教員

稲葉カヨ（生命科学研究科・教授）、山田文（法学研究科・教授）、久家慶子（理学研究科・准教授）、高橋幸（高等教育研究開発推進機構・准教授）、有吉真理子（工学研究科・助教）、北村由美（東南アジア研究所・助教）、田中祐理子（人文学研究所・助教）、中池竜一（教育学研究科・助教）、野村英子（理学研究科・助教）、山田義春（工学研究科・助教）、山根久代（農学研究科・助教）、近藤（有田）恵（心の未来研究センター・研究員）



連載：研究者になる！－第22回－

東南アジア研究所・教授

速水洋子



思えば、「自分は研究者になるんだ！」と思い決めたことはない。「もう少し」とつづけるうちに、今に至っているというのが本当のところである。

私は、文化人類学という分野で研究を始めた。大学の学部時代、特に三年間は大学に行っている日数より、「課外活動」で山登りに入っている日数の方が多かったのではないかと。卒業論文という段になって、せっかく人類学を学んでいるのだからとにかくフィールド調査というものをやってみようという思いで、まさに趣味と実益を兼ねて好きだった南アルプス山麓の村で調査をしたのが、本当に自分で研究をすることの面白さを知る第一歩だった。文献で読んだ文化や社会の理解、分析方法を、村に入って話を聞いたり観察したことによってどのように適用できるのか、それで何がわかるのか、そしてそれをどのように書いて伝えるのか、という過程の面白さにハマった。

しかし研究者になろうと思っていたわけではなく、就職活動も始めていた。その時まで女である自分が、社会に出ることの持つ意味を考えてみたこともなかったのが、いざ就職活動を始めてみると、これまで何の区別もないと思っていた男子学生と、入り口のところで全く異なる扱いをうけるのだということを知らされた。その一方で、人類学が好きで当然そのまま「学者」になるのだろうと思っていた男性の先輩たちは、家業をついだり、就職をしていった。大学院を教える教員が「男は就職を世話しなくてはならないが、女は嫁に行ってくれるから気軽にとれる」と言っていたような時代である。

そういうわけで、卒業研究で感じた面白さから「もう少し勉強してみたい」という気持ちと、「就職する場を選択できない」というモラトリアム状況が相半ばして、ここは一気に自分を違う環境に追い込んでみよう、と、大学院留学を決めた。当時、共同体の宗教行為と身体的パフォーマンス（平たく言えば、たとえばお祭りで、禊ぎをしたり、太鼓の音で舞を舞うなど）に関心があり、そうした研究で最も興味をそそられた論者は、皆アメリカの人類学者だったこと、アメリカの大学院は最初は徹底的に勉強させると聞いていたこと、などからそれまでの自分の中途半端な学生生活にけりをつける意味もあり、留学することにした。

大学院生活そのものは、楽しくも死に物狂いに近いものがあつた。しかしその中で直線的に邁進するどころか、特に二十代は迷いばかりで、迷いつつ蛇行しながら「もう少しやってみよう」という気持ちをその都度確かめながら進んできた。文化人類学は、フィールド調査が大きな節目となる。調査地を決め、言語を学び、長期調査を実施し、それに基づいて論文を書く。このプロセスを始めると、中途半端に途中でやめることができない。フィールドをタイに決め、言語を学び、（またしても）山地のフィールドに入り、その勢いで今まで続けてきたと言ってもいい。いったん調査を始めると、生身の人間同士の関係が基盤になる。調査地でお世話になり、いろいろな話を聞かせていただき、関係を築いたら、途中で易々と引き返せない。最初の調査地とはすでに二十年を超えるつきあいとなる。当初の関心は少数民族にとっての儀礼や宗教だったが、現地での関わりができると、ジェンダーや家族に関心が向かわずにはおれなかった。そうしてテーマを広げ、対象地域も隣国ビルマを含めて広げながら、なるべくより高次のレベルの理解へと引き上げる作業につとめる。文化人類学の醍醐味は、常に対象地域で観察する事象と、自分自身の日常や当然とみなしている価値や範疇とを、往還しながら再考する絶え間ない営みである。私にとって、研究をすることはいつも自分の足下から見直す過程でもある。

そうして自分の調査研究が本格的に始まってからも、本当にやめようか、と思ったことがある。博論執筆直後に妊娠し、子供が生まれ、非常勤講師をしながら育児をしていた頃である。投稿論文を少しずつ出しながら、公募に出しまくっては落ちまくり、就職がままならなかった頃である。たまに研究会などに顔を出すと、自分がどんだん世の中から、おいてきぼりになっていくような感覚をおぼえた。ただ、そのときも書くことは鬱憤はらしにもなり、とにかく職があってもなくても書けることがあるあいだは書こう、と開き直ったことが、最終的には職を得ることにつながったのだと思う。そして、おかげさまで何とか職のとっかかりを得てからは、どんなに大変でも、子供と過ごす時間があることは自分の生活感覚のバランスにとっては本当にプラスに働いてきたと思う。きっと仕事だけだったら私はつぶれていたし、育児だけだったら子供をつぶしていた(?)と思う。



Center for Women Researchers

〒 606-8303 京都市左京区吉田橘町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>